

総 合 発 表

会 長 挨 拶

東北農業試験研究協議会長 岩 崎 勝 直

第七回東北農業試験研究会の開催にあたりまして岩手県農業試験場、その他の研究機関の方々には会場の準備、その他格段の御配慮をいたさしまして主催者の一人として厚く御礼申し上げます。

本年は春に未曾有の霜害があり、又6月から7月にかけて非常に長い間不良天候が続きまして、作物の生育には色々問題がありましたが、幸い7月の22日頃から天候も回復いたしまして今後の天候が順調なら相当の作況が期待できますようで、まことにこの点御同慶にたえない次第であります。

東北農業試験研究発表会も年々盛んになつているが、現在日本の農村は未曾有の変革時期に際会していることは御承知の通りであります。それにいたしましても我々試験研究機関に勤務している者としては、現下の大きな変動期に際会して、農業技術に要請される期待は非常に大きいということを痛感しております。

昨年は、東北におきます農事・園芸・畜産・蚕糸、全部の研究機関の合作によりまして新しい技術の指導指針を策定致しましたが、本年は農政局が中心となりまして我々研究機関の成果に基いて、更に普及の方に移すための措置がとられることになりました事はこれ又御同慶にたえない次第であります。現在の様に非常に新しい技術に対する要求が熾烈であり、又その問題の解決に非常にスピードを要求されている、この時期にあつては各研究機関はもはや、ただ孤立して研究してゐるだけでは十分な成果が期待出来ないわけで、従つて今後ますます各研究機関の間の協力分担を一層緊密にして速やかに問題を解決することに一層の努力をいたしたいと思ひます。そういう意味におきまして、この研究発表会は非常に大きな意味をもつていると思ひます。どうか本日から二日間にわたりまして熱心なる研究発表と討議が行われまして成果を上げられます事を願ひ致しまして、簡単ではありますが大会の御挨拶に交える次第であります。

水稲作における農家集団による大規模生産方式の問題点

小 笠 原 璋

(山 形 県 農 試)

私は大規模生産方式による稲作集団栽培の普及に反対する者ではない。また稲作栽培農家が集団して大規模な生産方式を採用した経営をやることにも異論をとらえないものではない。大局的にみて稲作が東北農業の基幹部門であるから、今日さげばれているところの農業近代化は稲作経営の近代化・合理化ということからとりくまねばならないことも重々知つてゐる。また、それには稲作の労働生産性の向上をはからねばならぬことをも信じてゐる。であるから稲作の経営方式の改善は省力化を前提とした大規模生産方式機械化稲作の確立の一日も早きをこいねがう一人である。

すでに東北のそれぞれの県ではある農家集団の稲作生産過程に入り込んだ機械化実験集落とか、総合実験農場とかで、この目的のための稲作経営方式の確立をはかつてゐるであろうが、これの運営にはおそらく「農家の負担を少なくする」ため機械設備その他物心両面で多額の援助なり補助なりをなしている筈である。つまるところこれらは農家の真の経営ではなくして、第三者が農家の経営の場を借りて行つた試験の域を出ぬものである。

山形県においても昭和38年から庄内において経営規模3ha以上の稲単作農家6戸を対象に「水田作機械化総合実験農場」を実施している。この設計にあつて、当初考えたことはこの農場は、まず水田の集団区分を行い6戸の農家による栽培管理組合を組織し、栽培協定を結び、その栽培管理の内容を「個別」から「集団」へ進めていくことを考えた。もちろんこの実施は段階的にステップバイステップの手順で行こうとしたのであるが、結局農家をしてそこまで踏み切らすまでにいたらずこれは不可能であつた。かくて貸与した大農機具一主としてトラクターによる耕うん整地の共同利用、共同田植乾燥施設の共同利用などの内容にとゞまらざるを得ない実情である。「農家集団による水稲作の大規模生産方式」という立場からいへばかゝる生産方式の門口に片足だけしか入れられなかつたということになる。しかし、私は農場を設置するまでに数多く農家との話し合いをもつたがその過程においていろいろ暗示させられる多くの事項を知ると同時に「手間をかけず、金をかけず、所得を向上させる近代的な稲作経営の確立」を目標とする総合実験農場の

使命からすれば現段階ではこれでいいのだと考えている。なぜなら「経営の急激な変革は農家の犠牲をとらなう」という信念をもつからである。

愛知県豊田市の安城をはじめ関東・関西・西日本の各地で稲作の生産が集団栽培の方式によつて成功をおさめている事例がある。しかしあれらはそれらの農村（農家）をとりまく社会経済的な環境・条件が成功のための大きい要素として関与していることを見落してはいけぬのである。私は端的に言つて東北においては未だ稲作農家をして集団による大規模生産方式に迫りやるまでに社会経済的な条件が成就しておらずと看做するのである。しかし、個別農家の家族労働によつて狭い圃場を対象とした零細な稲づくりの経営が東北における稲づくりの方式として将来長く存続するとは思っていない。他産業の発展・経済の伸長にともなつて農業労働者も少なくなるとするならば、ごく近い時期には否応なしに大規模生産方式の稲作経営が必然性をもつてくるであろう。この場合の問題点として今日までの総合実証農場運営の経験を通して若干指摘してみたい。

1. 農家集団による大規模生産方式の実施に当つては第一に個別農家の経営内容を単純化することが必要である。

2. 大型化する機械化作業の効率を高めるために土地基盤の整備を行うことは最も望ましいことではあるが、これには多大の投資を必要とすることであるから言うべくして仲々簡単には実行できぬものである。したがつてまず、農家相互間の話し合いによつて稲作の作業規模を拡大することである。たとえば同一水系内にある水田は耕作者がちがつていても同様の生産手段がとれるようにし圃場集団ごとに同一の作業を一時に行えるようにする。

3. 稲作栽培管理技術は高い技術水準へ規格化し、また単純化することである。集団栽培の出発点は個別農家単位の技術をより高い水準で農家集団単位の共通技術として規格化することである。かかる技術は同一水系内で集団区分した広域で統一的に採用するようにする。しかし、このように規格・統一化することによつて個々の農

家の所得面にはプラスになる農家もでるし、またマイナスにでる農家もでるのでこゝにも問題がある。

4. 技術を専門化し技術の精度を高め作業の能率をあげるようにする。つまり個別の技術を集団の技術へ規格化し単純化すれば、その集団に属する農家は技術全般に習熟する必要がなくなり、仲間内で最もすぐれた人が夫々の、技術を分化担当することによつて技術の精度を高め作業の能率をあげることができるといふのであるが、この問題は共同あるいは協業経営の場合にもプラスになる事項としてよく挙げられるけれども実際にはそう簡単にはいかない。今日のすべての稲作農家は、自分の水田の性格は自分が一番よく知つてゐるという自覚をみんなもつてゐる。集団栽培が自己の水田の生産物が個人に帰属するというたてまえをとつてゐる限り集団的に統一された栽培管理では所有者は満足しなくなる。これについては次項で述べる集団の組織化の権威如何にもよるが、必ず農家は手直し作業を実施するであろう。神経をつかつた二重の手間をかけるのである、これが案外集団栽培運営のガンとなる。若しこの問題が問題にならぬようになるには極端な労力不足か、兼業的な稲作農家となりうる社会経済的な条件の環境成立が必要となる。

5. 農業集団の組織化—集団栽培では集団区分、品種の統一、共同苗代、施肥、防除、用水管理など主要作業の部分的な共同作業から、ひいては全面的作業へすゝむことを考えねばならないが、しかし共同作業の分野が拡大すればするほど個別農家は自己の持田に勝手な手入れをするようになる。したがつて話し合いできめた「協定」を破らぬようにするためにはこれを遵守させるようにする組織体をつくらねばならぬ。この運営の中心となる農家は稲作に積極的でかつ深い技術経験をもち、組織力も統率力もある専業農家の世帯主がのぞましいが、かかる人材は容易に得られない。

6. 最後に大規模生産方式の中核をなす大型機械による稲作の技術体系が未確立であることは問題点といへば何よりも大きい。しかも決定的な問題であるといわねばならない。

稲作における農家集団による大規模生産方式の問題点

—西郷村のトラクター利用について—

今 泉 七 郎

(福島県農試)

1 ま え が き

日本農業はトラクター利用の歴史が浅く、その技術的・経営的基盤の整備が遅れている。

しかし近年労力不足に拍車をかけられ、農業技術の方向も収量増大技術から、省力技術へと転換するようになり、収量増大技術と省力技術が、一体となつて生産性を高める総合技術として検討されつつある。

トラクターの利用も小型の歩行式から、大・中型の乗用式へと、大きな転換をなしつつあり、農業構造改善事業での基幹的役割を果そうとしている。構造改善事業での機械化の目標は、トラクターを中心とした機械化一貫作業であるが、このためには、尙技術的・経営的にいくつかの取残された問題がある。

こゝにとり上げたトラクター利用は、福島県西白河郡